HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの虐待と認知に関する研究 ： 発達障害的な特徴に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小泉, 径子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11503号
Issue Date	2014-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56680
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	MICHIKO_Koizumi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　　氏名：小泉　径子

学位論文名

子どもの虐待と認知に関する研究

――発達障害的な特徴に着目して――

近年、子どもの虐待は重大な社会問題となっている。子どもたちの被害は、虐待家庭から救出されるだけでは終わらず、その後も貧困、非行・犯罪、精神疾患、離・再婚を繰り返すなどの不安定な状況に陥りやすく、自らも自分の子どもを虐待してしまうなどの様々な困難を示すことが多い。

本論文における研究の目的は、虐待を受けた子どもたちへの支援技術の向上や、支援者の教育などに役立てるため、虐待を受けた子どもによく見られる特徴を客観的な指標によって明らかにすることで共有可能な知識としてまとめることである。特に本研究では、虐待を受けた子どもたちが示す様々な特徴のうち、子どもの社会適応を考える上で重要であると考えられる、他者の表情理解能力、自閉症傾向、衝動性と時間の３つに着目した。

第 1 章では、他者の表情からその人物の感情を読み取る能力について検討を行った。臨床現場からの報告では、虐待を受けた子どもは、自身や他者の感情に対して鈍感であることが度々述べられている。本研究では、「目からこころを読むテスト（Reading the Mind in the Eyes Test）」（Baron-Cohen et al., 2001a）を用いて、虐待を受けた子ども（44 名）と一般家庭の子ども（85 名）との間で他者の表情の理解能力にどのような違いがみられるかを検討した。実験の結果、虐待を受けた子どもは、一般家庭の子どもに比べて他者のポジティブな表情（e.g., 幸せな気持ちでいる等）の理解が苦手であるという結果がみられた。ネガティブな表情（e.g., 悲しい気持ちでいる等）やニュートラルな表情（e.g., 考え事をしている）ではこのような傾向はみられなかった。また、この傾向は、質問紙で測定した自閉症傾向（AQ-C）の効果を統制した上でもみられた。

第２章では、自閉症傾向尺度（AQ-C; Baron-Cohen et al., 2001b）を用いて、虐待を受けた子どもの示す認知の特徴を測定することを試みた。自閉症傾向は社会的スキル、コミュニケーション、想像力、注意の切り替え、細部への注意という、自閉症スペクトラム障害（ASD）のある者によくみられる５つの認知の特徴を測定する尺度である。虐待を受けた子どもにはしばしばASDと似たコミュニケーションの困難（発達障害様症状）が見られ、

その症状と ASD が示す症状との鑑別は困難である。しかし、虐待を受けた子どもは、適切な養育環境に置くことでその症状が劇的に回復することが明らかにされているため、両者の間の症状の原因は異なっている可能性がある。本調査では、虐待を受けた子ども（58 名）、一般家庭の ASD のある子ども（22 名）、一般家庭の定型発達の子ども（34 名）の 3 群における自閉症傾向を比較することで、虐待を受けた子どもと ASD のある子どもで共通する部分と異なる部分を明らかにした。調査の結果、社会的スキル、コミュニケーション、注意の切り替えの 3 項目において、虐待を受けた子どもは ASD のある子どもと同等の傾向を示したが、細部への注意に関しては一般家庭の子どもと同等の傾向を示した。想像力については一般家庭の子どもと ASD のある子どもの中間であることが明らかになった。

第 3 章では、虐待を受けた子どもの示す衝動性と時間感覚に注目した。虐待を受けた子どもには衝動性の高さや刹那的な行動が多くみられ、薬物やアルコールなどのアディクションに陥りやすいといわれている。本研究では、時間割引課題（Kirby et al., 1999）を用い、虐待を受けた子ども（27 名）と一般家庭の子ども（45 名）を比較することで子どもの衝動性を測定した。時間割引課題は、経済的な利益を受け取る際に、時間的な遅れがあった場合における選好を測定する課題である。人間は、いますぐ受け取る利益に比べて、将来受け取る利益の価値を低く見積もる傾向（割引率）があることが明らかにされており、その傾向には個人差が存在する。これまでの研究によって衝動性の高さ、将来の不確実さの見積もり、主観的な時間感覚が割引率に大きな影響を与えることが明らかにされているため、虐待を受けた子どもの衝動性や、言語化しづらい将来に対する感覚などを考察する手がかりとなるのではないかと考えられる。実験の結果、虐待を受けた子どもは割引率が高く（将来受け取る利益の価値を低く見積もる）、また、回答の一貫性が低いことが示された。この点から、虐待を受けた子どもは衝動性が高く、一貫した時間感覚の獲得に困難がみられることが示唆された。

第 4 章では、３つの実験結果から総合考察を行った。

第 1 章でみられたポジティブな表情の理解の困難は、虐待を受けた子どもは親からポジティブな表情を向けられたことが少ないために、ポジティブな表情についての学習が不足していることや、人間は他者の感情を自らの体性感覚を通じて理解する(embodied theory)が、自身がポジティブな感情を経験したことが少ないために、他者のポジティブな感情の理解にも困難があることによって生じる可能性や、あるいは暴力から身を守るために、暴力のサインである怒り顔に対して敏感に反応し、ポジティブな表情に対して注意をあまり払っていないことなどによって生じている可能性などが考えられる。

第 2 章でみられた AQ-C の得点傾向から、虐待を受けた子どもは他者の感情を想像すること自体の困難は ASD のある子どもより小さいものの、実際のコミュニケーション場面に

おいて、それを活かして適切に振る舞うことができないと考えられる。

第 3 章で示された衝動性の高さと一貫した時間感覚の獲得の困難は、虐待を受けた子どもたちの安心感の持てなさや、家庭環境の変化の激しさなどにより、将来の不確実性が高く、安定した見通しが立てづらいことや、危険の多い環境で生き抜くために短期的な生存戦略を選択していることが影響しているのではないか。

これらの結果を総括すると、養育者のポジティブな表情や自らのポジティブな経験の不足や、家庭の孤立による他者とのコミュニケーション経験の不足のような社会的学習の不足が原因で、このような特性が生じている可能性が考えられた。そのほか、虐待家庭という環境で生き延びるため、他者の怒り表情への過敏性が生じ、目の前の危険に対処するために短期的な生存戦略を取るといった、虐待という環境への適応によってこのような認知が形成された可能性も考えられる。

本研究では制度上の限界により、虐待種別や期間、時期、発達障害の有無などの評価を行うことができなかった。これらは子どもの認知の発達に影響を与えていると考えられる。

今後はこれらの点を明らかにするために、医療機関等と連携し、虐待種別や期間、家庭環境といったより詳しい生育歴の検討を加え、MRI や生理的指標を用いて生物学的な基盤を検討することや、縦断的研究を行い、その変化や介入の有効性を検討することを行うことを目指す。